

白秋アートギャラリー (10)

牡丹焚火

薄葉 茂

福島県須賀川市の国の名勝、牡丹園。二百五十年以上の歴史があり、十ヘクタールの敷地に二百九十種、七千株の牡丹が植栽されている。私の故郷の福島県鏡石町は須賀川市の隣町で牡丹園から六キロ。小学生の時は牡丹が咲く頃に遠足で訪れる場所だった。覚えているのは往復十二キロの道のりを歩き、疲れたことくらいだが、身近な牡丹園に北原白秋の歌碑があることは最近まで知らなかった。

須賀川の牡丹の木のめでたきを炉にくべよちふ雪

ふる夜半に

白秋が没した翌年の昭和十八年に刊行された歌集『牡丹の木』に収められている一首で、碑に記したのは歌集を編んだ白秋門下の木俣修だという。白秋がこれを詠んだのは終の住み家となった東京の杉並区阿佐ヶ谷に転居した昭和十五年頃。牡丹園を所有していた家の当主から知人を通じて牡丹の木を焚木として贈られ、その喜びを「新居にて」と題して詠んだ。前後に次の四首がある。

春ふかき牡丹にぞ思ふかがなべて眼を病みしより
幾とせ経たる

内うちこも隠るふかき牡丹のありやうは花ちり方に観きと
つたへよ

牡丹の黒木さしくべゐるりべやほかほかとあらむ
冬日おもほゆ

この束のそぼくばくの木色にして牡丹けだしやきそ昨句
ひける

牡丹の枯れ木を焚いて暖をとる風習は客人に対する風流なもてなしとされ、須賀川の牡丹園には毎年十一月の第三土曜日の宵に枯れ木の供養として「牡丹焚火」の行事がある。「おくのほそ道」紀行で松尾芭蕉が俳句仲間の知人宅に一週間も滞在した俳句が盛んな土地柄だ。「牡丹焚火」は地元の俳句結社の人たちの働きかけが実り、昭和五十三年に俳句歳時記の冬の季語として採用された。

美しい花を咲かせて枯れた牡丹の魂のような青紫色の炎と、ほのかに漂う香り。目を病んでいた白秋の脳裏には、詩に描いた頃の牡丹の世界観が甦ったか。昭和四年刊行の詩集『海約と雲』に「白牡丹」と題する作品がある。

白牡丹、宇宙なり。

また、かな薫す、もはら専らなる白。

この坐、すわりふたつなし、ただ。
位のみ。ああ、にはひのみ。